

群馬に入植民はいなかった

友 廣 哲 也

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- | | |
|----------------|------------|
| 1. はじめに | 7. 交易 |
| 2. 群馬県域の水田農耕 | 8. 土器構成の内容 |
| 3. 集団の構造 | 9. 入植民の規模 |
| 4. 集団の関係 | 10. むすび |
| 5. 石田川式土器の研究略史 | 11. おわりに |
| 6. 当時の時代背景 | |

— 要 旨 —

本稿は、近年『古墳王国として喧伝している群馬県域の古墳文化は在地の弥生時代からの人々が創出したものではなく、東海地方の人々が作り上げたものである』という定説に対する検討の結果である。入植民説は弥生時代末から古墳時代前期に東海地方から大挙して人が井野川流域に入植し、その結果、S字状口縁台付甕を主体とする東海系土器文化に一気に変換させたというものである。つまり『群馬県域の古墳時代を構築したのは群馬県の人ではなく、遠く離れた東海地方の人たちである』というのが群馬県内の研究者たちの考えである。

筆者の検討では、群馬県の古墳時代前期のS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群は存在していないのである。近年の発掘調査資料では、群馬県在地の弥生土器樽式土器文化から、古墳時代土師器文化に変換したのは間違いない。『後漢書東夷伝』には弥生時代後期、2世紀後半から3世紀前半は「倭国大乱」、卑弥呼の死は240年代後半といわれ、まさに弥生時代末から古墳時代初頭にあたる。さらに『魏志倭人伝』には、卑弥呼の死後は「男王国中不服更相誅殺當時殺千餘人」という社会背景にあった。いわば戦乱状態である。また、『魏志倭人伝』には当時の倭国には牛、馬、虎、豹、羊、鵲は存在していないとある。群馬県から東海地方は直線距離で約400km離れている。入植を成就するには戦乱状態の中、何千何万という人々が武器を持ち、徒歩で道なき道を歩きぬき、度重なる戦闘にすべて打ち勝ち、夜昼問わず、熊、猪、狼に対峙し、井野川流域を制覇し、土器の構成を一気にS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群に変えさせ、規制し、新たな古墳王国を打ち立てたのである。ここでは入植民の問題に絞り、土器・社会背景から再度検討する。

キーワード

対象時代 古墳時代前期
対象地域 群馬県
研究対象 入植民

1. はじめに

群馬県の研究者は古墳時代文化の成立は、在地の弥生時代からの人々とは文化の系譜が続かないとしている。古墳時代になると他地域から異なった人々が入植・移住し、新たな社会が創出するというのが研究者間の統一された見解である。

すなわち古墳時代になると、今まで弥生時代を育んできた土地に、東海地方から多くの人々が入植し、新たな社会・文化を造り上げたというものである。

現在ではその最大の根拠は、群馬県内の古墳時代前期の土器構成が、S字状口縁台付甕を主体とする東海様式に一気に変換するからであるとされている。これが根拠となり、入植民説は、群馬県内の研究者には定説・常識となっている。

入植民説が生まれたのは、1952年石田川遺跡の調査が実施され、1968年に刊行された報告書「石田川」に示された。以来県内の研究者は、すべてこの説に賛同し従った。石田川遺跡とは現在の太田市を南東流する石田川の護岸工事に伴い確認された遺跡で、遺構と出土した土器を工事の合間に記録したものである。石田川遺跡出土土器は当初は弥生時代後期の土器と考えられ、群馬県内の並行する樽式土器とはあまりに異なっていたために、樽式土器文化圏以外の場所から別の文化を持った人々が来て、新たな社会を造ったとした。それが根拠となり、入植民説が成立した。つまり、現在の根拠とは時期が異なっている。石田川遺跡出土土器はその後、土師器であることがわかり、樽式土器との時期の違いが分かったのちも、入植民説は様々に内容や様相を変えながら現在に至っている。この結果今では弥生時代とは系譜の異なる土器や文化をもった、新たな人々の社会が出現したとされている。筆者はこの説に対しては別の意見を持ち、弥生時代から古墳時代への移行を考えている。すなわち人の入植や移住による新しい社会の創出ではない、と考えている。筆者は群馬県域では縄文時代から弥生時代を通じて、東海・畿内・北陸・甲信・南関東地方とは常に交流を維持し、深めながら古墳時代を迎えたと考えている。筆者はここでは入植民の存在があったかどうか論点を絞り、当時の社会・時代背景から本当に入植がありうるかどうかを明確にすべく検討してみたい。

近年、民族考古学の研究が進み、様々な研究、論考が増えている。ここでは高橋龍三郎氏の一連の研究成果を踏まえ、中国の文字資料である『魏志倭人伝』もあわせ、弥生・古墳移行期の社会背景を明らかにしながら入植という問題を検討したい。

2. 群馬県域の水田農耕

水田耕作が開始されたのは群馬県域では弥生時代中期頃と分かってきた。平野部への集落の展開、また谷水田

の傍への集落立地の変換、立地のあり方も水田耕作ということ的前提とした社会構造が理解できるようになってきた。出土する土器も、条痕文系土器が少なくなり、栗林式土器へと変換する。土器の変換は生活スタイルの大きな変化に伴い、器種も増え、集落立地も低い標高へ展開する。その時代は、どのような社会背景の中で変化してきたのかを確認しながら検討したい。

筆者は弥生時代中期の水田耕作の開始をもって弥生時代の生業の画期と考えるが、画期をもたらしたのは水田耕作ではなく、水田耕作を開始した人間の意志であると考える。

それは水田耕作の導入が人間集団をどのように定義づけるのかではなく、稲作を始めようとした時のリーダーや人間集団がどのようなことを志向、指向して決断の手続きを踏んだのか、つまり立地の返還や稲作を始めることが社会の中でどのような決断であったのかを考える必要があると考えるからである。

そのような社会背景や人間集団の決断は、どこにあるのか。ここではまず弥生時代という社会背景を確認し、その一端を垣間見たいと考えている。

まず弥生時代はどんな社会だったのか、豊かな実りをもたらす平和な農耕社会であったのか。教科書や絵画で、あたり一面に稲穂が実り、貫頭衣を着た男女と子供がほつみ刈をしている絵をよく見る。弥生時代とは平和な時代なのか、あるいは違うのか。文字資料のない時代である。当時の様子を知る手掛かりとして中国の書を開いてみると、日本の弥生時代が確認できる記載を見つけることができる。『後漢書東夷伝』に桓靈帝の間「倭国大乱更相攻伐曆年無主」桓靈帝の間とは146～189年である。これは鬼道に優れた卑弥呼が王になるきっかけを作った「倭国大乱」である。さらに、『魏志倭人伝』に卑弥呼が死んで「男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人」、再度「相誅殺」が始まったとある。卑弥呼の死はほぼ3世紀中葉、その後壹与が王となり、静まったとある。両書には弥生時代後期に2度の戦乱があったことが記録されているわけである。弥生時代の戦乱の証拠として、佐賀県吉野ヶ里遺跡の甕棺に葬られた首なしの人骨はよく知られている。鳥取県に所在する妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡は弥生時代中期から古墳時代前期の集落遺跡である。青谷上寺地遺跡では殺傷痕を持つ人骨が多数確認され、鳥取大学医学部の井上貴央氏は青谷上寺地遺跡出土の5000点に及ぶ人骨を検討し、人骨は90体に及び、このうち100点を超える人骨に殺傷痕を確認した。「人骨は無秩序に散らばって出土し、隣り合う骨が繋がった状態(交連状態)を保っているものはほとんど認められなかった。」と指摘し、なくなってすぐに埋葬された骨ではないとしている(井上2009)。人骨に共伴する土器から弥生時代後期後半(2世紀代)としている。井上氏は青谷上寺地

遺跡の殺傷人骨は朝鮮半島南部の人の頭蓋の形質に近い事を指摘している。

井上氏は人骨からは、脊椎カリエス、変形性脊椎症、貧血を認め、骨からみた平均寿命は男30歳代、女性が20歳代と記載している。

弥生時代の戦乱は受傷人骨の研究から橋口達也氏が九州地方の戦闘の有様を指摘している(橋口2007)。群馬県では戦闘、戦乱の事実が認められる遺跡、遺構は確認できないが、渋川市有馬条里遺跡で弥生時代中期の人骨が出土し、森本岩太郎氏、吉田俊爾氏は殺傷人骨とした。人骨は女性で7か所の鋭利な刃物による刀創がある。「後頭部の一撃が大腦の後頭葉にまで達し、これが致命傷と考えても不自然ではない。」鋭利な刃物傷はかなり深く、「この人骨を殺傷した武器は鉄製刀剣類とみても差し支えないと思われる。」としている。また刀創には治癒機転はなく、後頭部に一撃を受けた時と同じ時に切り付けられたとしている(森本・吉田1989)。これは戦闘ではないが、鉄製刀剣を実際に使った殺傷人骨である。有馬条里遺跡の南に接した有馬遺跡では弥生時代後期の礫床墓から鉄剣が8振り出土している。他に硝子玉、鉄製釧、青銅製釧、青銅製鏃等が確認されている。墓は100基を越え、鉄剣を持つ人、持たない人の差を確認することができる。

高橋氏はリニージ(血族集団)、クラン(氏族集団)の存在を紹介している。氏によれば社会の不平等性(格差)は、定住社会にさらに大きな変化を見ている(格差は筆者の註)。日本では縄文時代後晩期には環状集落等の存在を指摘し、氏族集団が存在し、不平等性の存在の萌芽とした。もちろん不平等性は縄文時代から弥生時代に入って、さらに進み格差の広がりは継続していく(高橋2001)。

3. 集団の構造

農耕社会では生産物が増えると余剰生産物を他の価値と交換することが始まる。「邸閣あり、国々に市あり」(『魏志倭人伝』)余剰物の取引等が弥生時代のリーダーの仕事となる。つまりリーダーの余剰を生み出す技量にかかわってくる、失敗すればグループ内にいられない場合もありうると高橋氏は紹介している。つまり、できるだけ広い農地と広い土地を耕すための人がいればそのグループは豊かといえ、戦争状態に陥れば豊かな鉄製武器を持つ集団が有利となる。

豊かさは鉄製武器だけでなく耕作に使う農具をたくさん持つことができる。定住農耕社会は集団の大小によって生産量も左右され、集団内だけでなく集団同士の豊かさにも差を生んでいく。

高島忠平氏は環濠集落の発展・拡大・整備から九州弥生時代社会の発展を3段階に分けている(高島2016)。

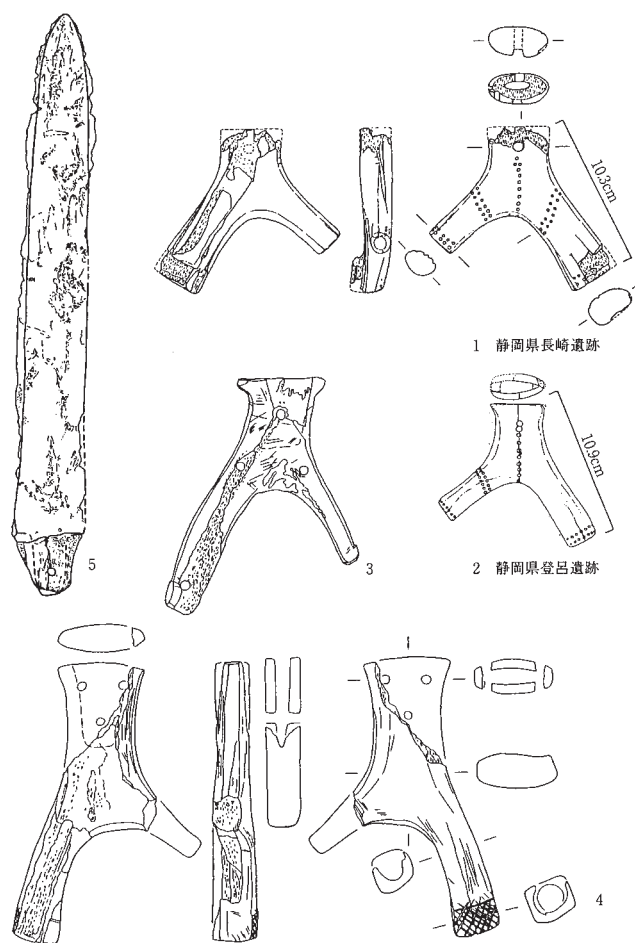
第一段階:農業開始期(縄文晩期後半～弥生前期後半)
— 農耕社会の成立と定着

第二段階:「国」成立期(弥生前期末～中期前半) — 「国」の成立

第三段階:「国」相互期(弥生時代中期後半から弥生時代後期) — 「国」の連合化

高島氏は上記の段階を設定し、3世紀を激動の時代と評している。この三段階を見ると第三段階が倭国大乱と卑弥呼のなくなった時代といえることができる。つまり第三段階には二回の戦乱があったことが記録されているわけである。

このように国の形ができた以後大乱が生じる。つまり集団同士が連合、同盟を結び、さらに大きな氏族集団を構成する。収穫物が増え、余剰価値が大きくなると、氏族集団同士の戦乱が起きると考えられる。



第1図 新保田中村前遺跡出土鹿角製柄(3・4)・有馬遺跡出土鉄剣(5)

群馬県では弥生時代中期が稲作の開始期にあたるが、それは東日本では群馬県に限ったことではない。埼玉県、長野県をはじめ東日本の特徴である。関東地方では水田耕作の開始は中期以降にピークがある。この理解は広いエリアの中で、ほぼ同時に開始されたと考えられることができる。例えば米づくりに平野部に移動するには最小の血族集団である、家族だけではできない。豊草原の国は数

人では水田とすることはできない。田を耕すだけではなく、給排水路の土木工事にも必要であり、大勢の人の労働力が必要となる。群馬県では弥生時代中期に平野部に環濠を伴う集落が出現した。それは今までの生活習慣を変え新たな社会に向かう決断である。まさにリーダーの決断とその提示を多くの血族集団、あるいは大きな氏族集団の決断であると理解できる。このときに新たな血族集団、氏族集団の結合、連合、拡大があったと考えることができる。

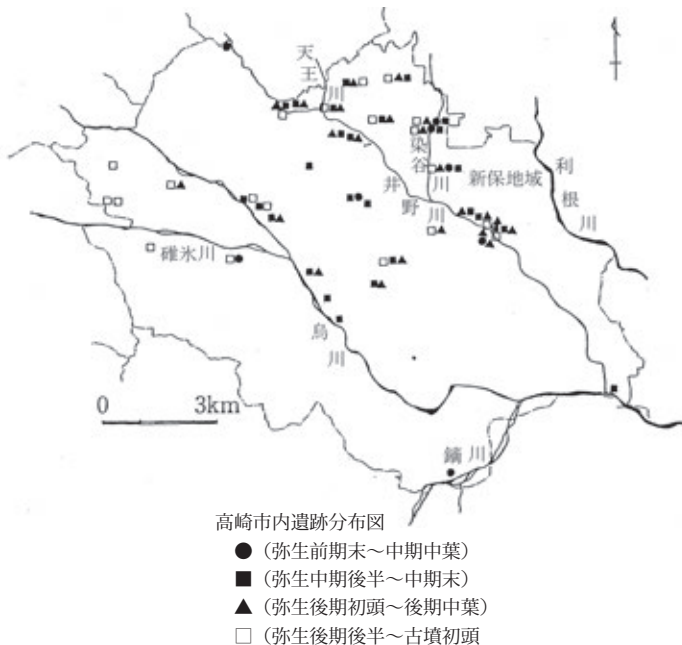
筆者は関東地方のほぼ同時期の平野部進出には多くのリーダーたちの情報共有、交換が存在したと考えている。また、群馬県内で環濠集落が作られたのは中期の遺跡群である。高崎市、前橋市の平野部には河川沿いに集落が作られる。しかし、彼らは決して自由に立地の変換を遂げたとは考えられない。もともとの集落に近い所か、地形を選んだ、当然他の集団との対話、情報交換、交流があったはずである。戦乱の痕跡はなく、話し合いのない突然の集落立地の変換はなかったと考えられる。弥生中期は有馬遺跡や有馬条里遺跡のような鉄製刀剣を持ったすべての集団はまだ同盟集団ではない可能性もあるからである。しかし、新たな農地の選定にはリーダーたちの話し合いがあっただろうし、ある程度の親縁関係を持っていた可能性は高い。先述した渋川市有馬遺跡では弥生後期の礫床墓から鉄剣や硝子玉等多数確認されている。高崎市八幡遺跡で墓から鉄剣が出土した。(調査報告書には墓の覆土中には小礫が詰まっていたという。礫床墓の可能性が高い。)同日高遺跡、同新保田中村前遺跡、同小林山台遺跡でも礫床墓が確認されている。有馬遺跡は、礫床墓・壺棺墓が主体であるが、ここに挙げた高崎市内の遺跡で確認された礫床墓は1～数基が周溝墓や土壌墓の中に確認されている。礫床墓だけではなく、壺棺を周溝墓の主体部に置くものが新保遺跡に確認され、有馬遺跡では壺棺墓も多く、礫床墓の礫床の上に壺棺がおかれるものも確認されている。このような墓のあり方からみて筆者は出自が異なった系統の集団から来た人の墓、と考えている。また、有馬遺跡の礫床墓からは鉄剣が各々8振り確認され、鉄剣の柄やハバキに鹿角が確認されている。鹿角製の柄は新保田中村前遺跡で原材料の鹿角と、未成品の柄が確認され、新保田中村前遺跡で作っていたことが確認できる。つまり、相手を攻撃する鉄剣の柄の拵えを供給しているのが新保田中村前遺跡である。もちろん柄だけでなく剣も装着して供給したであろう。武器を供給したことから、すでに氏族集団間の同盟関係が確立していた可能性が高いと判断できる。もちろん鉄剣は柄だけの供給ではなく、目釘孔など剣とあつらえはセットである。剣と合わせなければ製造できないであろう。剣を供給しているわけである。筆者は墓のありようと合わせて、後期になると高崎市、渋川市域を含む大きな同

盟の存在を指摘できると考えている。

4. 集団の関係

高崎市新保町にある新保地域(新保遺跡・新保田中村前遺跡の2遺跡をあわせ筆者は同じ集落と考え、地域と呼んでいる。)は染谷川沿いに所在し、染谷川は南流し、約1.5kmで井野川にそそいでいる広い意味で井野川流域にあたる。弥生時代中期に始まった水田耕作は井野川流域周辺の高崎城遺跡、高崎競馬場遺跡で環濠集落を営んだ、同時期の環濠集落として前橋市清里庚申塚遺跡、富岡市阿曽岡・権現堂遺跡がある。柿沼恵介氏は渋川市有馬条里遺跡、中村遺跡群は拠点性の強い環濠集落と指摘し、新保地域以外にも拠点集落の存在を指摘している(柿沼1999)。

新保地域で作られた鉄剣の柄が有馬遺跡の集団に供給されていた。さらに新保地域では木器や木製農具が作られ、木弓用の棒(イヌガヤ)や加工された板材が備蓄されている。さらに大量の農具や生活用具が多数出土し、筆者は新保地域が「市」であると指摘した(友廣2015)。群馬県内各地域の中で「市」の存在の可能性が考えられるが、出土遺物から「市」と指摘できるのは今のところ新保地域のみであり、時期は出土遺物から大木紳一郎氏によれば、栗林のⅡ以降の段階が主体で弥生時代中期にはじまり古

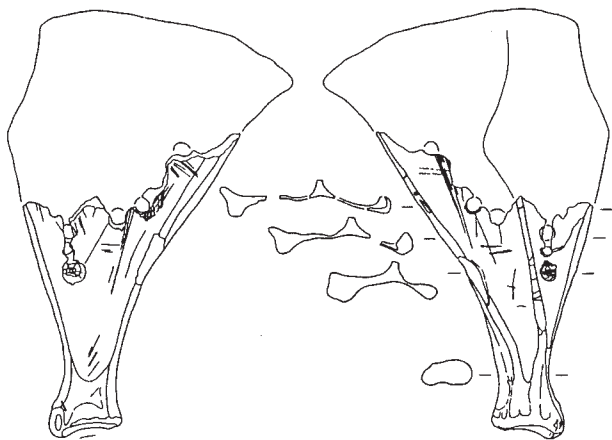


第2図 高崎市周辺弥生時代遺跡(高崎市史引用(一部改変))

墳時代前期に継続していく遺跡である(大木1994)。

「市」の機能としては土器、木器、木材、鹿角、木弓、鏃、ト骨用の鹿やイノシシの肩甲骨等々が出土し、管理し保管しなければならないものばかりである。筆者は『魏志倭人伝』にある「國國有市交易有無」と考えている。このような交易の存在はおそらく近隣地域間の交易が主で、更に近隣を通して範囲が広がっていたものと考えてい

る。つまり群馬の人がいきなり、九州へ行って鉄などを仕入れることはない。戦乱時に自分たちのテリトリーを出た人間が、他国の異集団に遭遇した場合はどう処遇されるかわからない時代である。弥生時代末から古墳時代初頭とは卑弥呼がなくなった頃である。「卑弥呼以死……更立男王國中不服更相誅殺當時殺千餘人……」（『魏志倭人伝』）弥生時代末から古墳時代前期にかけては戦乱の中である。しかし、経済行為である交易は確実に続き、群馬県域内でも他地域の系譜を引く土器が大量に増える時代である。群馬県域内では戦闘行為を示す遺構や出土人骨はほとんどないが、経済行為は盛んに行われていた。遠方ではなく長野県など近隣の「市」との交易は弥生時代後期、さらに確実に深く、太くなっていたことは間違いない。朝鮮半島から北九州にわたった鉄器は、日本海ルートをとどり、新潟（上越）から南下し、長野県から群馬の地へ運ばれたのである。橋本博文氏は新潟県三条市、加茂市の古墳前期の土器は、北陸系の土器よりも新潟北東部系の土器が多いと指摘している（橋本2016）。したがって上越から北へは交易はあまり伸びず、南に向かうことが多かったと考えることができる。長野と群馬は同じ栗林式土器を持ち、新潟東部より、北陸系土器の出土が多くなる。つまり、長野と群馬、新潟（上越）は弥生時代から古墳時代へと深い交易があったことがわかる。古墳時



第3図 新保田中村前遺跡出土灼骨

代に入り、交易がさらに緊密になったと考えられる。

ここで交易のルートを示したが、鉄のルートと土器のルートも同じ道を辿ることができる。有馬遺跡や県内の鉄剣を作る鉄は、おそらく北九州、山陰妻木晩田遺跡、青谷上寺地遺跡などを経由し、上越に到達する。そして南下したと理解できる。鉄剣、鉄製品その他、鉄製工具等は新保地域のような「市」に管理され、農具の作成等に使われたであろう。鉄剣の柄の加工、硬い鹿角製の柄の加工には当然鉄製工具が必要とされた。また、「市」を管理する人は鉄製の鎌や鉄製武器で管理保管されている

「もの」を守り、「市」そのものの存在・機能をも守ったものと考えられる。

5. 石田川式土器の研究略史

群馬県では古墳時代前期に石田川式土器という土器様式がある。現在の太田市石田川の護岸工事で見つかった土師器であることから命名された。石田川遺跡出土土器は土師器平底甕の甕型土器、単口縁台付甕、壺型土器、小型埴、高杯等々が住居跡内から出土した（当初は弥生土器とされた）。台付甕の中にS字状口縁台付甕が含まれていた。今まで県内北西部、赤城山西南麓、榛名山南東麓に集中していた樽式土器とは形状があまりにもかけ離れていたため、新たな土器の出土に県内研究者は目を見張った。まだその頃はS字状口縁台付甕の出自が伊勢湾沿岸地域にあることが分かっていなかった。S字状口縁台付甕と命名し、世に広まったのは1958年、増井義巳氏の論考である。増井氏はS字状口縁台付甕を指して「……これは一風変わった特徴を備えているため、東日本で弥生式土器最末期の資料を見られた人は、誰でも一応は注意される土器である。」と紹介し、石田川遺跡に限らず、関東地方に出土していた事実を指摘している（増井1958）。石田川遺跡東約2km、高林遺跡が調査され、「群馬県高林遺跡の調査」の中で、調査を担当した大塚初重氏、小林三郎氏はS字状口縁台付甕が長野県や山梨県で出土することを指摘していた（大塚、小林1967）。

石田川遺跡の調査が行われたのが1952年、報告書が刊行されたのは1968年である。

報告書で松島榮治氏は、「……即ち、石田川式土器と樽式土器は相互に独自性を保ちつつ並存し、しかも、石田川式土器文化は樽式土器文化の東進をも牽制し、阻止したのではないだろうか。そこには石田川式土器文化の古墳築造にみる卓越した経済力、政治力並びに高度に発達した文化があったと推察される。」さらに「即ち、石田川式土器文化は、この地域あるいは周辺において自生したものとは云えない……」S字状口縁台付甕に注目し、群馬県に新たな文化を持った人々が入植したとした（松島1968）。これが入植民説が成立した瞬間である。入植民説はその後、県内すべての研究者が賛同し、支持され定着した。S字状口縁台付甕が伊勢湾沿岸で作られたことが分かってからは、東海地方から入植民が来たことが受け入れられ、現在に続いている。そして古墳時代を創出した石田川式土器とは東海地方からの入植民が持ち込んだS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器である、とされて今日も続いている。

石田川遺跡出土土器を見ると、S字状口縁台付甕、単口縁台付甕、土師器平底甕、北陸系甕や小型土器に交じり、小型埴の出土もある。石田川遺跡が発見されたところ並行して埼玉県五領遺跡出土土師器の研究が進んでいた。大塚氏が五領遺跡の土器を土師器とされたのは1961

年のことである。五領遺跡のシンポジウムでも弥生時代末期から土師器への変遷経過を示さねばならないことが論じられていた。また大塚氏、小林氏は高林遺跡を調査し、石田川遺跡と同様の土器が出土し、編年の位置づけは前代の弥生土器からの関連例の確認を待って、という慎重な立場をとるべきと指摘していた(大塚、小林1965)。岩崎卓也氏、玉口時雄氏も同じ指摘をしていた(岩崎、玉口1966)。

その後昭和50年代～平成にかけて群馬県内で上越新幹線、関越自動車道、北関東自動車道、上信越自動車道等の大型プロジェクトに伴う大規模発掘が進み、樽式土器と土師器との関連が確認できる資料が増えた。樽式土器と土師器が共伴する例が爆発的に増えた、が群馬県内の研究者は入植説を維持し、現在も続いている。

6. 当時の時代背景

研究略史を見てきたが、ここでは入植があったとされる時代背景をしっかりとみて、入植が本当に行えた地理関係、社会背景を確認することによって明らかとしたい。

S字状口縁台付甕が東海地方伊勢湾沿岸で作られたのは現在分かっている。東海地方からS字状口縁台付甕を携え、井野川流域にきた入植民はどうやってどのくらいの数で来たのだろうか。伊勢湾沿岸から群馬県域は直線距離で約400km離れている。『魏志倭人伝』には「其地無牛馬虎豹羊鵲」当時の日本には牛、馬、虎や豹、鵲がいなかった。つまり、400kmを歩いてこななければならない。道はないし、井野川流域に到達する前には多くの他集団の集落が存在している。周りは卑弥呼がなくなり「相誅殺」のさなかである。新保地域では熊、猪、鹿、日本狼の骨が出土している。

弥生時代末から古墳時代初頭、入植民たちは周りが戦乱状態で、牛、馬もなく土器をもって他の集団の土地に入り、井野川流域を目指した。他集団のテリトリーに入れば命を失うか奴隷とされる。また夜昼を問わず狼、熊、猪に襲われる。『魏志倭人伝』には弥生時代には生口、奴婢等の奴隷が存在し、身分の差が存在することが記載されている。仁藤敦史氏は正口とは戦争捕虜であるとしている(仁藤2016)。他の集団のテリトリーに入り、捕まれば奴隷にされるか、「相誅殺」命を奪われるのである。つまり、他人の土地を侵犯して戦争をしながら、井野川流域を目指すわけである。さらに、狼や熊、猪等の獣と戦いながら。当然武器が必要である。武器を持った集団が他人のテリトリーを犯して進むわけである。また見ず知らずの集団のところへ行って食料や衣料を調達するのである。ただでくれるわけではない。命のやり取りの連続である。

伊勢湾沿岸には伊勢湾にそそぐ川が多数ある。川の周辺にいた氏族集団の成員であれば更に周辺に連合、同盟

を進めることが一番当たり前である。國をすて集団を上げて、井野川流域を目指すのはまさに命をかけた挑戦の行軍である。自らの土地、地縁をすて武器をもって井野川流域を目指したのである。また伊勢湾沿岸には狗奴國が存在したという説もある。邪馬台国に従わずという國である。もしこの説どおりであれば武器を持った集団が狗奴國を通り抜けてきたのである。それ以外にも他國や他集団のテリトリーを進んできたはずである。農耕集団の國を武器を持った集団が通り抜けて歩いて進み、S字状口縁台付甕をもって移動した。入植民は井野川流域の知識があったのか。他國や他集団のテリトリーを抜けるには戦闘を繰り返す覚悟が必要である。捕まれば奴婢、生口にされるか命を奪われる。またどの道筋を通ったのか、当時は道が無い、おそらく川筋に沿って移動しただろう。川沿いを歩き、天竜川を北上し、長野を歩き群馬にきたのだろうか、長野は群馬とは同じ栗林土器圏内にあり、群馬の交易の密接な相手である。入植民の情報は届いていたはずだ。

また東京湾から船で北上するという説もあるが、何人乗りの船で何艘必要なのか。その船は東京湾で手に入るのか、あるいは船で伊勢湾岸から直接来るのか、そうでなければ陸路では船を担いで運ぶしかない。船で来れば途中漁労を生業とする集団の川や海のテリトリーを犯すことになる。陸路も海路も戦闘を繰り返しながら井野川流域へ向かうことになる。何人の人が生き残れるのか。東京湾からどの川を上ると井野川流域に当たるのか、あるいはたまたま井野川流域にきたのか、いずれにせよ多くの命の危険を冒し、戦いつづけなければならない、夜もゆっくりと眠れない行軍である。さらに、すべての戦いに勝利しなければ、井野川流域への入植は成就しない。そのためには膨大な人数、武器がなくては成立しない。

万が一井野川流域にたどり着いたとして、井野川流域には当時の「市」新保地域が存在し、弥生時代から古墳時代前期に「市」の機能を充分果たしていた。ト骨を行い、木器を作り、鉄剣の柄を作り、鹿狩りをし、鹿角には角座骨がついたものもある。新保地域の人々の狩猟地に入ればやはり「相誅殺」である。

内野那奈氏は争いの存在を縄文時代にあったことを紹介している。縄文時代では弓により鏃を打ち込み接近戦になることを示している(内野2016)。

新保地域の人は『魏志倭人伝』に記載のある木弓、骨鏃を持ち、農具を持ち、井野川流域に多くの集落、集団が存在していた。それも有馬遺跡の鉄剣の柄を作り、剣を供給していたところである。八幡遺跡の礫床墓からも鉄剣が出土している。すでに現在の高崎から渋川市間には「市」を通し、連合か同盟がはあったことが考えられる。入植民は戦闘に勝たなくては井野川流域に定着できない。なぜなら井野川流域に入植するには他人の土地を

奪い、水利を奪い、「市」を奪わなくてはならない。しかし、400kmを歩き、戦い続けた何人の戦士が残っていたのだろうか。そんなことがあれば、青谷上寺地遺跡のように殺傷痕を持つ人骨が多数出土しなければならない。400kmを歩きぬいて、着くの何日もかかっている。食料や衣料はすべて伊勢湾沿岸から持ってきたのだろうか。男だけなのか、女性や家族子供はいないのか、連戦を繰り返しながらの長旅の最終地である。井野川流域の多数の地元民と井野川流域を取り巻くように存在する多くの在地の人はどんな対応をしたのだろうか(第2図)。伊勢湾沿岸から見ず知らずの人が武器をもって井野川流域に現れたら「相誅殺」高崎や渋川の集団から鉄剣、木弓、鉄鏃、骨鏃を持って人々を取り囲んだらう。高崎や渋川との間には「市」を通して連合や同盟とともに弥生時代を通して親縁性があり、この異邦人集団に対して鉄剣、木弓、鏃を装備していた在地の人はどう対応したのだろうか。新保地域の「市」は弥生末期から古墳前期にかけて入植があったとされた時、活発に機能していた。

7. 交易

井野川流域には筆者が「市」と呼んでいる新保地域がある。新保地域には大量の「もの」が保管、管理されていたことは前述した。獣骨や鹿角も大量に出土し、ト骨に使う鹿、猪の肩甲骨が多量に一ヶ所に固まって出土したことは管理された状態であることが分かる。

また農具は製品や未製品も多く、木材として加工された板材も出土している。樹種も当時の東日本には少ないとされるカシ材もあるが、全体から見れば少量である。農具を含む木器は総量2371点、カシは215点クヌギが

1186点、その他970点である。この中でカシは全体の215点9%であるが、農具の中で比率をみると128点41%になる。このことから新保地域の中で木器製作の管理、材による使い分け等の製造、管理を行っていたことが分かる。農具には少ないカシ材を当てている。鉄剣の柄は鹿角製で、鉄剣の出土は見られないが、鉄や鉄製工具があったことが指摘できる。周辺の井野川流域には弥生時代中期から古墳時代前期に至る遺跡が多い(第2図)。新保地域自体も中期から古墳時代前期に至る継続遺跡である。井野川流域周辺には前述したように高崎競馬場遺跡、高崎城遺跡の環濠集落が作られ、中期に平野部に移り、古墳前期まで遺跡が継続し広がっている。つまり、弥生時代を通して水田耕作を継続していた集落群である。鹿角は落角や前頭骨角座骨があるものも含まれ、狩りをしていただことがわかる。当然狩場も彼らのテリトリーである。製作用の鹿角やト骨用の肩甲骨の収集でもあった。鹿角は相当固く剣の柄にするためには鉄製の工具を必要としたと考えられる。鉄を持っていたであろう。

武器を持った入植集団が歩きついた時、どのような結末を迎えたのだろうか。見ず知らずの他人が何人いたかはわからないが、武器を携え入植目的であるとなると、在地の人々は決して自分たちの土地を与え、水利権を与えたとは考えにくい。また、新保地域の「市」は高崎、前橋、渋川に「もの」を供給している。云ってみれば、入植があれば「市」の機能が止まってしまう。鉄剣を持った人々は自分たちの社会、土地、「市」を守るために戦うはずだ。高崎から渋川の集団は「市」を守るためにも「相誅殺」、鉄剣、木弓、鉄鏃、骨鏃を使ったはずである。

入植民がこの戦いに勝ち抜くためには相当量の人数とそれに伴う相当量の武器が必要となる。

8. 土器構成の内容

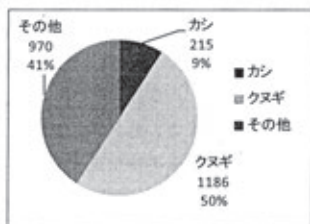
入植説の根拠では、群馬県内の土器構成が一気にS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器に変換するとされている。井野川流域の「市」である新保地域の土器構成を見てみよう。甕を持つ住居跡数は38軒、S字状口縁台付甕を持つ住居跡24軒、単口縁台付甕7軒、土師器平底甕29軒、樽式土器甕18軒である(延べ軒数)。

甕を持つ住居跡の大半は複数の他の器種を持っている。S字状口縁台付甕を持っている住居跡は38軒中24軒で14軒は持っていない。S字状口縁台付甕だけを甕として持っている住居跡は4軒である。

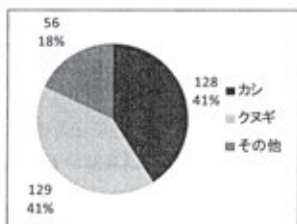
S字状口縁台付甕は土師器平底甕、単口縁台付甕、樽式土器とも相伴しているわけである。新保田中村前遺跡52号土坑から111個体の土器が出土している。このうちS字状口縁台付甕が48点、土師器平底甕14点、単口縁台付甕1点、二重口縁壺4点、高杯12点、器台10点、埴、鉢等10点、さらに弥生土器の破片が5点出土している。弥

第1表 新保地域樹種

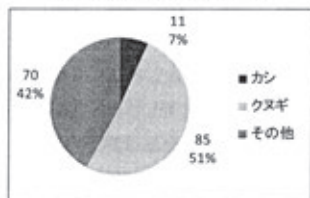
新保地域	カシ	クヌギ	その他	計
農具	128	129	56	313
工具	11	85	70	166
建築・加工材	76	972	844	1892
計	215	1186	970	2371



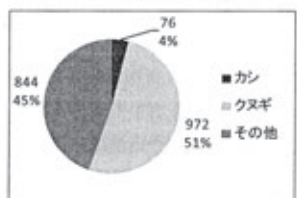
第4図 新保地域の樹種比率



第5図 新保地域の農具比率



第6図 新保地域の工具比率

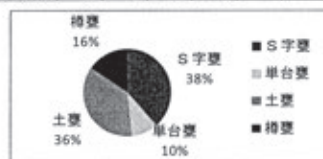


第7図 新保地域の加工材比率

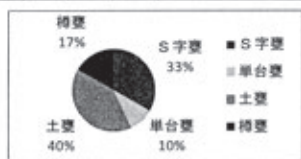
新保地域の住居跡別出土土器一覧

第2表 新保田中村前遺跡										
住居跡	S字型	単口型	土器	樽	高	器台	埴	他	総数	備考
2号	2		1			1			6	堀広がる高坪・二重口縁壺
19号	1				2	1		1	6	堀広がる高坪・二重口縁壺
148号	4				1		1		8	堀広がる高坪・二重口縁壺
149号	1		2		2				5	堀広がる高坪・二重口縁壺
150号	1		1						2	堀広がる高坪・二重口縁壺
151号			2						2	堀広がる高坪・二重口縁壺
153号	8		2	6	7	1	1		25	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
155号	1		2	2	3		1		12	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
156号	1		2	1		2			6	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
157号	3		1		1	3		1	9	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
174号	1				1				2	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
新保田中村前遺跡IV			2	4	1	2			9	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
205号			3	1	1	1			18	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
243号			3	1	1	1			6	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
254号			1	1					4	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
14軒	24	1	19	15	19	13	4		111	二重口縁壺・樽壺・樽高坪
延べ軒数	11	1	11	6						

第3表 新保遺跡										
住居跡	S字型	単口型	土器	樽	高	器台	埴	他	総数	備考
16号	1		3	1	2				4	樽壺
70号	4				2	2		1	20	北陸小形土器・小形埴
86号	1			1					4	北陸小形土器・小形埴
100号	9		3		4		1	1	18	ひさご壺・小形埴
115号			2		1				3	ひさご壺・小形埴
116号	1		1		3				5	樽壺
120号	2		1		2				5	樽壺
125号	9		4		10		1	1	25	ひさご壺
135号		3			1	1			5	ひさご壺
140号			1		2	1			4	下段に絞高坪
141号	3	3	3		8	4		2	23	小型高坪・下段絞高坪
151号	2				2		1	2	7	ひさご壺・小形埴
155号	4	6	7		11	4	4	1	37	小型高坪
167号	1		1						2	小型高坪
170号			1		2	1		1	5	小型高坪
186号				2		1			4	小型高坪
191号		2							2	小型高坪
205号		1	3						4	小型高坪
280号			2				1		3	小形埴?
282号	2		3	4	3			1	13	樽壺
292号			5	1	3		2	4	12	樽壺
295号			1		3	1			8	樽壺
296号		1			1	2		1	6	小形高坪
298号	4		2		2		1		10	小形埴
計24軒	43	16	44	12	67	17	9	5	16	229
延べ軒数	13	6	18	6	18	9	5	5		
新保地域計	67	17	63	27						340
延べ軒数	24	7	29	12						



第8図 新保地域の出土土比率



第9図 新保地域の各土器出土延べ軒数

生土器は縄文が施文される南関東系破片が2点、在地樽式土器が2点、縄文が施文された上に簾状文が施されたものが1点ある。52号土坑は報告者は投棄の坑としているが、筆者は投棄ではなく保管、管理の可能性が指摘できると考えている。その中でも東海系S字状口縁台付甕、南関東系単口縁台付甕、在地土師器平底甕、北陸系平底甕、畿内系の二重口縁壺、小型埴、さらに樽式土器が共伴出土している。

さらに範囲を広げ、井野川流域を含む遺跡群の甕を出土する住居跡199軒を見てみると、S字状口縁台付甕419点(51%)、単口縁台付甕73点(9%)、土師器平底甕254点(31%)、樽式土器甕73点(9%)である。確かにS字状口縁台付甕が最大の比率を持っている(第4表～)。しかし、S字状口縁台付甕を主体とする甕だけを持つ住居跡数は16軒(13%)である。S字状口縁台付甕を持つ住居跡の中には小型埴や北陸系の土器を持つものがある。それを除けば更にパーセントが下がる。いずれにせよS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群ではない。

群馬に入植があった結果、群馬県域の土器構成はS字

状口縁台付甕を主体とする東海系土器群に一気に変換した。これが入植民説の根拠である。そして入植場所は様々になってきたが、現在は井野川流域に入植したとされている。

伊勢崎市の波志江中宿遺跡で粘土採掘坑が検出され、坑の中からS字状口縁台付甕が出土した。波志江中宿遺跡の粘土で作られたS字状口縁台付甕が周辺の波志江中野面遺跡から出土している。S字状口縁台付甕は明らかに群馬で作られている。藤根久氏、今村美智子氏は波志江中野面の土器胎土分析を行なっている。その中で波志江中宿的材料でできたS字状口縁台付甕と藤岡・富岡地域の粘土でできたS字状口縁台付甕が同一住居跡で共伴することを科学的に示した。さらに在地の粘土で作られた単口縁台付甕と北陸系甕が共伴する例を波志江中宿遺跡で示している(藤根、今村 2001a)。

前橋市元総社寺田遺跡では榛名山系の各々複数地域の粘土で作られたS字状口縁台付甕が12号住居跡で共伴出土している(藤根・今村2001b)。

つまり、波志江中宿遺跡では粘土採掘坑が確認され、中宿周辺には中宿の粘土で作られたS字状口縁台付甕がある。前橋市にある元総社寺田遺跡では榛名山系の複数個所の異なった粘土でできたS字状口縁台付甕が同一住居から共伴出土した。つまり土器生産体制と流通経路がすでに出来上がっていたことを示している。このように異なった場所の異なった粘土でできたS字状口縁台付甕、単口縁台付甕、北陸系甕や樽式甕の存在は群馬県内にすでに土器流通ルートが出来上がっていたことを示している。また他地域の土器であっても需要があれば現地の粘土で作ることが可能なのである。実際の群馬県内の土器の構成は様々な地域の系譜を引く土器や在地系の土器が混在していることが最大の特徴である。土器の側面から見ると新保地域の「市」はさまざまな器種の土器を作る技術を持つ人々と土器のストックの管理や供給ルートを持っていた。これは明確に「市」の存在を示すものである。群馬に生きていた人たちは「市」で自分の必要とするものを手に入れていた。弥生時代から古墳時代にかけて、この流通ルートが遮断された痕跡はなく、さらに土器の混在状況は増している。入植民が来て戦乱が起こり、「市」の機能が止まる遺跡や遺構はなく、群馬県域に戦争を思わせる殺傷人骨がないことと矛盾しない。さらに広い範囲の同盟関係を維持していたことは、広い範囲の粘土で作られた土器が移動して存在することとも矛盾しない。

高崎市、前橋市、渋川市に加え、伊勢崎市波志江周辺の遺跡では富岡市や藤岡市の片岩が混じる粘土を使用したS字状口縁台付甕が出土するなど広い範囲の集団間で流通網を維持していたのである。

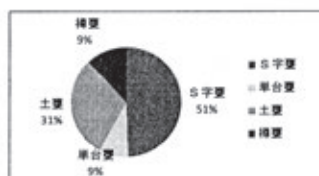
9. 入植民の規模

第4表 井野川流域の遺跡別出土集計

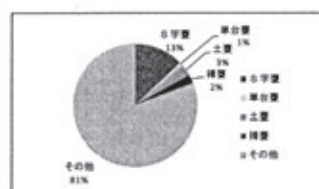
遺跡名	S字壺	単台壺	土壺	樽	壺	壺	壺	S壺	単台壺	土壺	壺
熊野堂・雨雲遺跡	6	12	13	8	39	70	10	55.7	15.3	30.7	33.3
新保遺跡	43	16	44	12	115	229	24	50.2	37.9	13.9	38.2
新保田中村前遺跡	24	1	19	15	59	111	14	53.1	40.6	1.6	32.2
八幡遺跡	44	9	28	12	93	178	19	52.2	47.3	9.6	30.1
高崎情報地遺跡	35	4	16	2	57	126	25	45.2	61.4	7	28
保渡田遺跡Ⅵ	11	8	10	7	36	72	9	50	30.5	22.2	27.7
倉加野万福寺遺跡	19	1	4	0	24	48	5	50	79.1	4.1	16.6
下齊田・滝川遺跡	11	11	25	0	47	99	3	47.5	23.4	23.4	53.1
下佐野遺跡	129	4	43	0	176	336	37	52.7	73.2	2.2	24.4
舟橋遺跡	11	0	5	0	16	33	6	48.5	68.7	0	31.2
元総社西川遺跡	14	3	2	1	20	32	4	62.5	70	15	10
熊島川遺跡	72	4	45	16	137	206	43	66.5	52.5	2.9	32.8
12遺跡合計	419	73	254	73	819	1540	199	53.2	51.1	8.9	31

第5表 井野川流域の壺単器種軒数

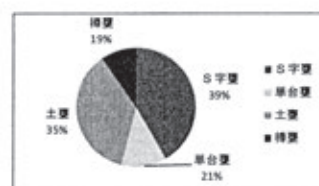
遺跡名	S字壺	単台壺	土壺	樽	壺	計
熊野堂・雨雲遺跡	0	0	0	0	10	10
新保遺跡	0	0	2	1	21	24
新保田中村前遺跡	1	0	0	0	13	14
八幡遺跡	3	0	0	1	15	19
高崎情報地遺跡	3	1	0	0	21	25
保渡田遺跡Ⅵ	0	0	0	0	9	9
倉加野万福寺遺跡	0	0	0	0	5	5
下齊田・滝川遺跡	0	0	0	0	3	3
下佐野遺跡	7	0	1	0	29	37
舟橋遺跡	1	0	1	0	4	6
元総社西川遺跡	1	0	0	1	2	4
熊島川遺跡	0	0	0	0	43	43
12遺跡合計	16	1	4	3	175	199



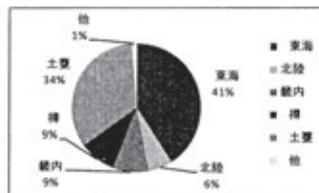
第10図 井野川流域の壺出土比率



第11図 井野川流域の壺単器種軒数



第12図 井野川流域の壺出土土延べ軒数



第13図 井野川流域の外來系土器

第6表 井野川流域の壺出土土延べ軒数

遺跡名	S字壺	単台壺	土壺	樽	合計
熊野堂・雨雲遺跡	3	6	7	4	20
新保遺跡	13	6	18	6	43
新保田中村前遺跡	11	1	11	6	29
八幡遺跡	13	8	12	4	37
高崎情報地遺跡	20	2	11	2	35
保渡田遺跡Ⅵ	4	5	7	5	21
倉加野万福寺遺跡	3	1	3	7	14
下齊田・滝川遺跡	2	3	3	8	16
下佐野遺跡	35	4	19	58	116
舟橋遺跡	5	0	4	9	19
元総社西川遺跡	3	1	2	1	7
熊島川遺跡	26	4	25	9	64
12遺跡合計	138	41	122	37	338

第7表 井野川流域の外來系土器

遺跡名	東海	北陸	畿内	樽	土壺	他	計
熊野堂・雨雲遺跡	3	0	1	4	7	1	16
新保遺跡	16	1	5	6	18	0	46
新保田中村前遺跡	12	1	12	6	11	0	42
八幡遺跡	15	5	1	4	12	0	37
高崎情報地遺跡	20	4	0	2	11	2	39
保渡田遺跡Ⅵ	7	0	1	5	7	0	20
倉加野万福寺遺跡	3	2	0	0	3	0	8
下齊田・滝川遺跡	3	0	0	0	3	0	6
下佐野遺跡	35	6	6	0	19	1	67
舟橋遺跡	5	0	1	0	4	0	10
元総社西川遺跡	2	0	1	1	2	1	7
熊島川遺跡	24	4	6	7	30	0	61
12遺跡合計	155	23	34	35	127	5	379

東海からの入植民の人数規模はどのくらいあったであろうか。入植民の規模、人数を検討したい。井野川流域に入植するには極めて大人数が必要と考えねばならない。さらに戦士だけではなく、入植を成功させるには、田を耕す人や農具、土器を作る人、粘土を掘る人、「市」の機能を管理する人、狩りをする人、漁労にかかわる人、鹿角を加工して鉄剣の柄を作る人等々様々な階層・職種の大勢の人が必要である。さらに、女性もいなければ東海地方の文化を継承する人が続かない。群馬で女性を探せばさらに戦闘状態が続くことになる。

入植があった古墳時代前期は新保地域の「市」の機能は継続している。さらに力仕事をする人たち奴婢等、様々な職種の人たちが必要である。奴婢は見張ってなけ

れば逃走の恐れもある、武器を持たせることができるか、戦争になったら戦えるだろうか。戦闘相手も奴婢だからと言って、襲わないということはない。井野川流域につくまでの戦争はすべて勝利したわけだから生口も多かったはずだし、すべて引き連れたのか、解放したのか。様々な問題がわいてくる。井野川流域にある新保地域は渋川市から伊勢崎、富岡、藤岡を含む広い範囲を網羅できるほどの流通ルートを維持し、前述のとおり周辺の集団間には同盟関係も安定していたことと理解できる。その中心地帯、井野川流域の田園地帯に入植するには極めて強力な戦闘集団が必要になるだろう。井野川流域は入植民が少人数で入ることができない場所である、当時の中心地帯である。

400kmの獣道を歩きぬき、其の間、繰り返してきた「相誅殺」を生き延びた戦士が何人必要であろう。井野川流域の遺跡のうち筆者は199軒をあげた。これは現代の開発行為のための発掘調査で、ほんの一部の調査である。実軒数は何十倍では足りず、何百倍と考えるのが妥当であろう。在地の人間たちをどかし、土地を奪うには相当数の戦士が必要となる。戦闘は地の利を得ている在地の人々のほうが断然有利であろう。100人、200人では太刀打ちできないし、職人や農民たちは武器を持つのか、奴隷は誰のために戦うのか。数百数千の武器を常に携帯していなければ戦えない。女性や子供老人は何をするのか。

東京湾から船で来るという説がある。何人乗りの船で何艘必要だろうか。10人乗り10艘だと100人である。この場合海を航海してこなければならぬ、なぜならば東京湾から船を使うには、船を担いで来なければならぬ。外洋船は川に入れるだろうか。井野川に入れる船の規模を承知しているのだろうか。船を担いでなければ、東京湾岸にきて船を調達する必要がある。どんな手段を使っただろうか。貨幣がない時代である。代わりに鉄を持ってきたら交換したのか。もし大量の鉄を持っていることが分かれば襲われてしまう。それをはねのけて、彼らは大事な鉄をもって命をかけて井野川流域を目指したことになる。井野川流域を目指して歩き始めた人々は途中で繰

り返してきた戦闘のすべてに勝ち抜かなければ井野川流域にたどり着けないのである。道中で出会った他集団にすべて戦い、勝ち抜かねば井野川流域の入植は成就しない。戦いに勝てばその土地を奪えるのに、彼らは自ら、その地を捨て、「生口」をすて井野川流域をめざし、一列になって行軍を続けた。

『魏志倭人伝』に道の記載がある。対馬国では「土地山嶮多深林道路如禽鹿徑」土地山嶮しく深い林が多く、獣道のような道。末盧国では道ではないが「草木茂盛行不見前人」草が繁茂して前を行く人が見えないとある。このような場所を400kmの距離を何千、何万の人は井野川流域をめざし、一列になって獣道、草木が繁茂し、前を歩く人も見えない道や場所を進んだ。平らで広い場所は集団が住んでいたはずである。野宿するにも場所もないし、夜昼となく草の間や森の中から熊や猪、狼が出てくる。

青谷上寺地遺跡の戦闘でも内野氏と同じく、井上氏もまず弓矢で相手を襲い、接近戦で相手を倒す戦法を示されている。地の利を得た在地の人たちは一列の集団を左右から矢を放ち挟み撃ちすることが考えられる。しかし、入植民はその戦闘のすべてに打ち勝って、奪い取った土地と田畑、生口を捨てて、井野川流域を目指し彼らは行軍した。

つまり、井野川流域に入植するには、井野川流域高崎、渋川周辺の集落の人間を打ち負かさねばならない以前に400kmの行程の間に何度も戦闘を重ね、すべてに勝利しなければ井野川流域に到達することはできない。そして得られた多くの正口を引き連れ、あるいは捨て、田畑を捨て、食料や衣類を手に入れた。相当規模、大人数が移動したはずである。膨大な人数の軍勢と鉄製武器、食料また野営地の構築が必要である。甕をS字状口縁台付甕に変換し、東海の土器一色にするにはS字状口縁台付甕、東海系の土器を作る職人集団、粘土採掘工、さらには藤岡や富岡をつなぐ需要・供給ルートをつくり「市」を作り広い範囲をカバーする必要がある。あるいは在地の「市」を奪うのである。管理者を倒しても流通ルート、供給網は自分で作らねばならない。新しい「市」にある「もの」を管理する人も「市」の機能を管理する人の存在も必要である。様々な職種の人々がいなければならない。もちろん農民も農具も必要である。土器職人や工人たちが必要である。さらに吉凶を占う卜骨を行なえる人も必要である。卜骨のような祭祀行為はリーダーが行なったと高橋氏は指摘している(高橋2001)。そのリーダーは誰だったのか、もちろん入植民のリーダーだったはずである。しかしながら、入植があったとされる時期以前から以後も新保地域の「市」は存在し、機能して卜骨も行われていた。入植が行われても戦闘を示す遺構や殺傷人骨の存在はなく、新保地域の「市」は、弥生時代から古墳時代にかけて活発

に機能していた。

10. むすび

高橋氏によれば、集団間の連合統合には戦争が不可欠であるという。現在では青谷上寺地遺跡の井上氏、北九州での高島氏、橋口氏等の検討での動乱の時代、殺傷の事実の研究の中で、井上氏、内野氏のように殺傷の方法までも示される中、群馬県内に入植説はどのように支持されるのか。

ここまで土器・当時の社会背景・入植の方法・ルート(陸路、海路)等々を検討してきたが、当時の弥生時代から古墳時代初頭期から前期にかけては「相誅殺」の最中であり、自らのテリトリーの外へ出れば命を失うことは当たり前前の時代背景である。

井野川流域の集落では筆者の検討では、土器からみるとS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群という規制もない自由な選択をしていたことが理解できる。決してS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器ではない。つまり、群馬県の古墳時代前期にS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器は存在していないのである(友廣2015)。

藤岡市・富岡市の粘土で作られたS字状口縁台付甕が伊勢崎市波志江中野面遺跡で出土し、榛名山系の異なった場所の粘土で作られたS字状口縁台付甕が前橋市元総社西川遺跡の12号住居跡から共伴出土している。伊勢崎市波志江中宿遺跡の粘土採掘坑の粘土で作られたS字状口縁台付甕が波志江地域周辺の遺跡で確認されている。これらのことから当時の群馬県域内では粘土を掘る場所と人、土器を作り、焼き上げる人たちと分業制が整っていたことが分かる。さらにその土器を需要に合わせた供給ルートも整備されていたことが分かる。前橋市元総社西川遺跡では榛名山系の異なった地域の粘土でできたS字状口縁台付甕を使っていた。つまり県内の粘土の取れる場所を承知していたわけである。土器を作る集団はわざわざ粘土を取りにいかずに搬送ルートとがあつたはずだ、あるいは粘土のあるそばで土器を作り、焼いたことも想定できる。そうすると焼きあがった土器を「市」に搬送する作業も必要になる。このような需要と供給に合わせた分業体制がすでに成立していたことが分かる。その中心が井野川流域の新保地域のような拠点集落であり、このような機能を持つ集落は群馬県域に何か所か存在していたと考えることができる。新保地域内でも木器や鉄剣の製造供給、「市」としての機能、鉄剣の拵え等の製作者集団、製作工程の管理者、製品や鉄、鹿角、鎌、木弓、卜骨用の肩甲骨等の「もの」を管理保管する人もいなければならない。鹿角製柄は鉄剣となり、新保地域から渋川市有馬遺跡へと供給されていた。礫床墓や地域の特徴を持つ弥生の墓は広い範囲の中で確認できた。墓の有様か

らも広い通婚圏、すでに同盟や同じ氏族集団のメンバーになっていたと考えれば、それが戦争のなかったことの最大の理由である。「國國相誅殺」がなかった理由であろう。

最後にくり返しになるが、筆者の考えは、群馬県域のなかに殺傷人骨が少なく、戦争の痕跡が見当たらない最大の理由は外来集団が来なかったことである。青谷上寺地遺跡の受傷人骨の頭蓋骨からみると渡来系、半島系の人に近いとの指摘が井上氏によって示されている。弥生時代を通して戦争が起きるのは他の氏族集団同士の軋轢から生まれるものである。高島氏は激動の3世紀と呼ぶ、そのような時代である。群馬は弥生時代を通し、長い間広い範囲の中に複数集団を構成していた。筆者は弥生時代後期から古墳時代前期は、すでに高崎市、前橋市、伊勢崎市、藤岡市、富岡市とも土器の供給が可能となり、通婚も含めた同盟関係があったと考える。各々の地の粘土でできた土器が共伴することがその根拠である。さらに他國間の交易や、技術的な交流は特に長野県や新潟県の土越周辺から北陸地方との交流は頻繁に行われていたことが分かる。特に長野県との往来も当然あったはずである。つまり西日本のような戦乱にならなかったのは大きな人の移動が無かったことが最大の理由である。当然入植民もいなかったことが分かる。

即ち、本当に入植があれば、人数、行程、そして入植後の動き、まさに存在の根拠となる遺構・遺跡が必要である。弥生時代から古墳時代前期にかけ、新保地域の「市」の機能は活発に継続している。井野川流域にきた入植民と在地の人々は、目と鼻の先にいる人とたちと全く没交渉に存在したのか。当時の社会背景ではありえない話である。また入植民説では土器はS字状口縁台付甕を主体とする東海系土器群に一変させ、新たな古墳王国を創出したわけである。土器を一変させるためには、群馬県域の各地域、榛名山系、片岩を含有する藤岡・富岡、伊勢崎赤城山系の粘土の取れる場所を承知し、そこを奪い、次に土器をつくる場を奪い、S字状口縁台付甕を作るように、在地の工人に強制し、他の地域の土器や在地土器を作らせないということである。さらに需要と供給のルート、マーケット内のすべてに及び、「市」を管理し、コントロール、支配しなければ新たな入植社会の土器文化は成立されたとは言えないのである。当時の在地の土器群は様々な地域の土器を受け入れ、様々な土器が樽式土器と共伴出土している。在地の粘土で、在地の平底甕や南関東系の単口縁台付甕が作られている。S字状口縁台付甕主体に作っていることはない。出土土器を観察してもS字状口縁台付甕主体ではない。即ち需要があればこそその供給品である。

入植民説では工人集団も入植民の中にいなければならぬ。井野川流域では弥生時代中期から古墳時代前期に

かけて、水田農耕社会が途切れることなく継続している。従って、入植には土器だけではなく木器や農具を作る工人たちも必要になる。木器や農具は弥生時代から古墳時代にかけて継続して作り、管理されている。新保地域で鉄剣の柄になる鹿角製柄が出土している。鹿角製柄は弥生時代から古墳時代にかけて継続して作り管理されている。入植民がいたとしても「市」機能には一切かわりを持っていない。

入植の中で一番大切なのは戦士である。戦乱の中を勝ち進まなくてはならないからだ。戦士や職人たちも家族で参加すれば子供もいるだろう。厳選された戦士や職人だけでは入植後の社会はできない。女性もいなければ新たな東海社会は成立できない。他国の人が在地女性と結婚を望めば相当な軋轢が生じるだろう。戦闘になることだろう。

このように入植民たちの性別や職種、社会の上下関係の構成も多岐にわたる必要がある。ここまで来れば当然リーダーがいて支持を出していなければ収集がつかない。一方では、群馬には受傷人骨はほとんどなく、戦乱を想定させる遺構、遺跡はない。

卑弥呼がなくなり、「相誅殺」の中、東海の人たちは何を求め、安定を捨て、戦乱の中、400kmを歩いて、井野川流域をめざしたのか、その理由は何だろうか。戦乱は終わり、「相誅殺」が収まっても、入植意図を持った大勢の人が武器を携えて他国のテリトリーを侵犯すればどうなるかは充分承知していることである。他国と戦争にならなくても、夜昼を通して熊、猪、鹿、日本狼が彼らを脅かしている。そんな社会背景の中、井野川流域をめざし、あるき続けた。食料はどう調達したのか、着るものや病気の心配はなかったのか。このような大集団が「獣徑」、「不見前人」も見えないところを歩き井野川流域をめざしたのである。

弥生時代中期に水田耕作を始めた群馬では、同じ栗林式土器を持つ長野との交流・交易は弥生時代後期から古墳時代前期になるとさらに強く、太く結ばれていったのである。群馬県域の弥生時代から古墳時代前期は西日本のような戦乱は極めて少なく、逆に経済活動に伴う人や技術者間の出入りは頻繁にあり、交易、技術交流は絶え間なく盛んに行われていたのである。

11. おわりに

近年、群馬県は古墳王国の文言で群馬をアピールしている。群馬県の人間としては大変に喜ばしいことである。しかし、その古墳時代の根底はもともと群馬にいた人が創出したものではないとの説の上に成り立っている。入植民説が生まれて、いまだ議論すらないのには少々頷けないものである。

筆者は古墳王国の根底は東海の人ではなく、群馬県在

地の弥生時代樽式土器文化の人たちが構築したものと明確にすべきと考えている。筆者はここで自分の足元をじっくり見直し、自分の説として、ここに再度提唱したい。

入植民説が唱えられてからすでに50年を超えている。その間何の議論もなく継承されてきた。異議を唱える人もいなかった。

ここに明治大学石川日出志氏の一文を引用して最後としたい。

「考古学の議論の経緯や諸学説は、その時々のおくつもあつた可能性のなかのひとつの軌跡なのではないか。その当時の議論や判断の事実・根拠や可能性を確かめた上で、今あらたな議論をくみ上げる。自らの存立基盤をつねに問い直す近現代考古学史的思考を徹底したいと思うのである。」(石川 2013)

本小文は、平成28年度公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団職員自主研究活動事業を受けたものである。

引用・参考文献

- 石川日出志 2013「考古学研究の近現代史・学史を！」みずほ別冊『弥生研究の群像』一七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念一大和弥生の会 23～30頁
- 井上貴央 2009「鳥取発！青谷上寺地遺跡の弥生人―その骨や脳が語るもの」プレストレストコンクリート技術教会第18回シンポジウム論文集 (1)～(3)頁
- 岩崎卓也、玉口時雄 1966「土師器」『日本原始美術』6 146～148頁
- 内野那奈 2016「受傷人骨からみた縄文の争い」『立命館文学』立命館大学人文学会 472～485頁
- 大木紳一郎 1994「2号河川出土弥生土器について」『新保田中村前遺跡Ⅳ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 272～274頁
- 大塚初重、小林三郎 1967「群馬県高林遺跡の調査」『考古学集刊』第3巻第4号 57～76頁
- 柿沼恵介 1999 新編『高崎市史』資料編1 原始古代Ⅰ 高崎市史編さん委員会
- 仁藤敦史 2016「卑弥呼の「共立」と魏王朝・公孫氏政権」『纏向発見と邪馬台国の全貌』角川文化振興財団 92～119頁
- 高橋龍三郎編 2001『村落と社会の考古学』株式会社朝倉書店
- 高橋龍三郎 2016「縄文後・晩期におけるトーテミズムの可能性について」『古代』第138号 早稲田大学考古学会 75～141頁
- 友廣哲也 2015『土器変容にみる弥生・古墳移行期の実相』同成社
- 橋本博文 2016「越後平野南東部の古墳時代」新潟県考古学講演会(第2回)発表要旨
- 橋口達也 2007『弥生時代の戦い』雄山閣
- 増井義巳 1958「いわゆる古式土師器の問題」『考古学手帖』5 3～4頁
- 松島榮治・尾崎喜佐雄・今井新次 1968『石田川』石田川遺跡刊行会
- 藤根久・今村美智子 2001a「土器の胎土材料と粘土採掘坑対象堆積物の特徴」『波志江中宿遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 262～277頁
- 藤根久・今村美智子 2001b「S字状口縁台付甕胎土材料」『元総社西川遺跡』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 95～104頁
- 森本岩太郎・吉田俊彌「渋川市有馬条里遺跡出土の人骨について」『有馬条里遺跡Ⅰ』財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団 214～219頁
- 『有馬遺跡Ⅱ』1990 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団